

1 次期計画の策定にあたって

(1) 文化芸術を取り巻く情勢

- ア 「劇場、音楽堂等の活性化に関する法律(劇場法)」の制定(H24.6)
- イ 新たな文化芸術の台頭・クールジャパンの盛り上がり
- ウ 2020年東京オリンピック・パラリンピック競技大会の開催
- エ 地方創生の実現に向けた取り組みの必要性
- オ 文化芸術の振興に関する基本的な方針(第4次基本方針)閣議決定(H27.5)

(2) 計画の位置づけ

「千葉市文化芸術マスタープラン(H11.3策定)」の理念に基づき策定された「文化芸術振興計画(H20.3)」の評価を踏まえ、文化芸術を取り巻く環境の変化に対応した新たな計画として策定する。

(3) 計画期間

平成28～34年度(7年間) (新基本計画終期の翌年までとする。)

2 次期計画策定に向けた論点の整理

(1) 現計画の振り返り(総合評価:平成26年度千葉市文化芸術振興会議)

- ・現計画は、全体的にバランスが取れた計画となっており、概ね順調に進捗しているが、目標達成には至っていないものもある。
- ・または20～30年のサイクルで動いていることを踏まえて、今後、市に住んでもらいたい世代を重点に目標を立て、また、一過性の事業を行うのではなく、文化芸術体験(鑑賞・参加・活動)に関する意見を交換したり、共感したりできるようなところをつくり、これまで点であった文化芸術事業を線で結び、文化とひとをつなぎ、はぐくむことに努めるべき。

(2) 次期計画策定に関わる市民意識調査結果(H26年度)の概要

① 文化芸術を振興していくために力を入れてほしいこと ⇒「市民が気軽に文化芸術に親しむことができる身近な催しの充実」といった意見が多かった。	課題A: 気軽に文化芸術を楽しむことができる身近な催しの充実
② 文化芸術活動を行ううえで望むこと ⇒「同じ趣味を持つ人と交流を図りたい」「気軽に見られる発表の場がほしい」といった意見が多かった。	課題B: 文化芸術体験の共有を基にした交流の場づくり
③ 文化の情報入手について ⇒若者世代と他の世代で情報の入手手段に違いが大きかった。	課題C: 必要な人に必要なものを効率よく伝える広報の充実
④ 「文化的なまち」のイメージ ⇒「歴史があり伝統文化が受け継がれているまち」との意見が多かった。	課題D: 歴史の中の文化的要素・地域資源の発掘・活用
⑤ 「文化芸術の充実により期待する効果」⇒「子供が心豊かに成長する」といった意見が多かった。 ・「今後の千葉市の文化振興はどうあるべきか」⇒「子どもたちの文化芸術活動の充実」といった意見が多かった。	課題E: 若者・子どもの文化芸術体験の充実

(3) 千葉市新基本計画 成果指標(施策の柱3-3 文化を守り、はぐくむ)

施策名	指標名	単位	H23末値	H26末値	H29目標	H33目標
文化芸術の振興	A この1年間に文化芸術活動を行ったことがある	%	19.3	17.9	23.0	25.0
	B 文化・芸術に触れる場や機会を身近に感じる	%	32.5	27.4	37.5	40.0
	C 文化ホール入場者数	人	129,187	112,746	135,000	138,000
	D 千葉市美術館入場者数	人	104,000	145,972	110,000	113,000

3 国の第4次基本方針における成果指標と成果目標(H27.5閣議決定)

	指標	2009年結果	2020年目標
1	ホール、劇場、美術館及び博物館等で直近1年間に鑑賞活動をしたことがある	62.80%	約80%
2	直近1年間に、鑑賞を除く文化芸術活動をしたことがある	23.70%	約40%

4 基本的考え方

(1) 戦略的な視点

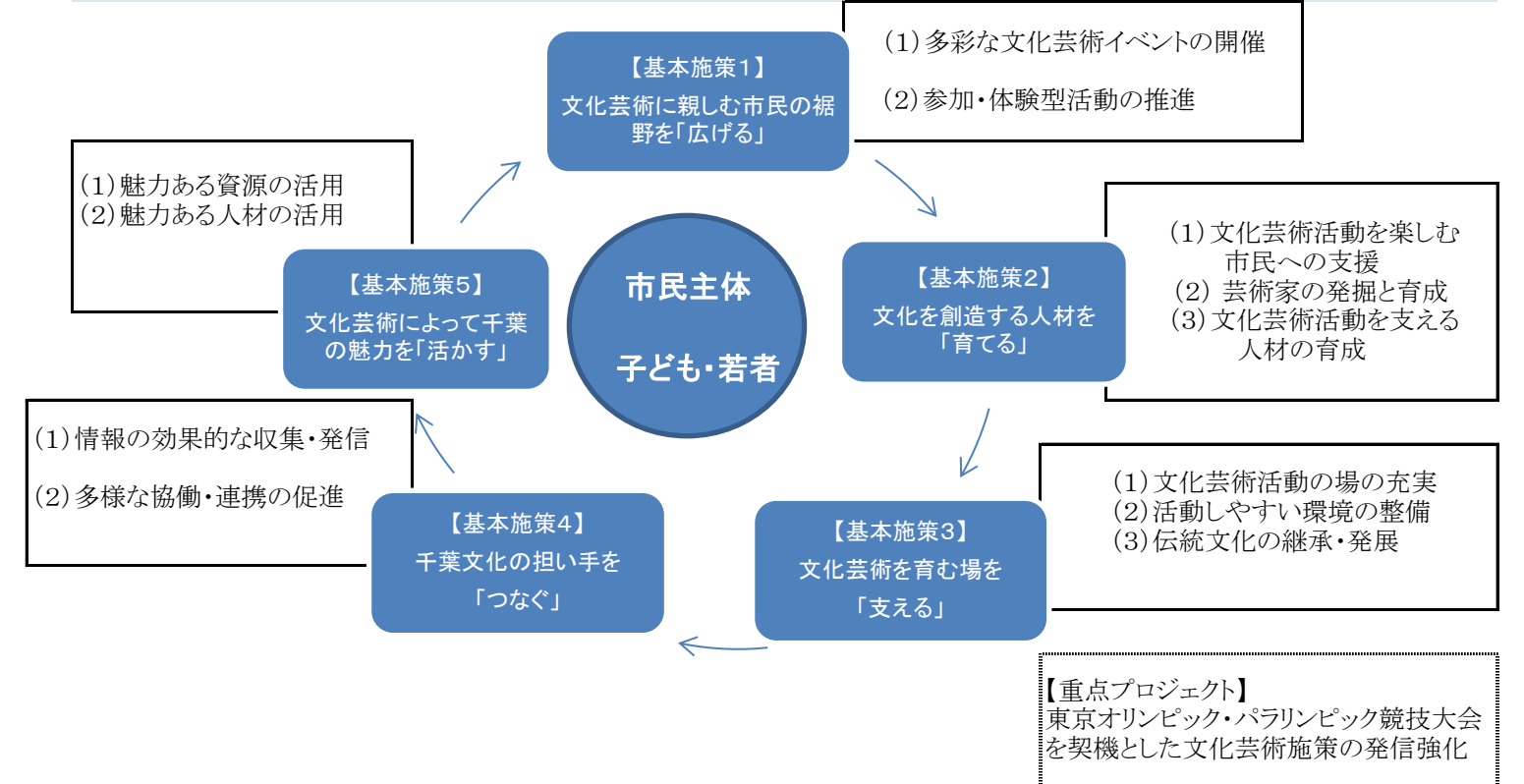
市民主体

あらゆる世代の市民が主体となる文化芸術活動の活性化を図るための循環をつくる。

子ども・若者

次代を担う子どもや若者が文化芸術に親しみ、また創造性を育むような施策展開を図る。

(2) 基本施策



(3) 事業展開にあたっての基本姿勢

文化芸術振興施策の軸を鑑賞型から活動・行動型へ

①文化を遊ぶ

多くの市民が楽しさやおもしろさを共感できるよう、文化芸術の間口を広く、敷居を低く設定し、日常的な活動への歩みを応援します。(文化的・芸術的活動への応援)

②共感と寛容

文化芸術の領域の広がりや、多層的な展開による新たな魅力ある文化芸術が創造されるまちを目指します。

(4) 目指すべき姿

あらゆる世代の市民が、文化による自己表現の場に触れ、共感を生み、つながり、文化を創り出す力にあふれたまち